

Title	上級学習者の作文授業 : 思考力を育てる論文作成指導の試み
Author(s)	大内, 豊久; 大塚, 淳子; 竹内, 夕美子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2011, 9, p. 9-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7597
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

上級学習者の作文授業

— 思考力を育てる論文作成指導の試み —

大内 豊久・大塚 淳子・竹内夕美子

【要旨】

大阪大学日本語日本文化教育研究センターの学部留学生プログラム上級コース（U A）は、学習者の日本語レベルに応じてU A 1、2、3に分けられており（2009～2010年度）、いずれのクラスでも週2コマの上級作文の授業が設けられている。授業では論文作成のための指導が求められるが、この指導においては、論文特有の文章表現とともに、論理的な思考力を育てることが必要だと考える。本稿では、論文作成に必要な論理的思考力を深めるために各クラスで行われた取り組みを紹介する。U A 1では、批判的思考を育てる試みやインタビュー・アンケートプロジェクトの試みを、U A 2では、クラス内ディスカッションを積極的に取り入れる試みを、U A 3では、日本語表現の指導を通じて学習者の思考力を深める試みを、それぞれ取り上げる。また、これらの実践上の課題についても述べる。

I. はじめに—上級作文で何が課題になるか

大阪大学日本語日本文化教育研究センターでは、日本の大学に進学する前に1年間の日本語教育を受けるコースがある。その中で、上級レベルとしてU Aクラスがある。2009～2010年度はU A 1～3の3クラスが置かれ、どのクラスも週2コマの作文の授業が設けられている。だが、一言でU Aクラスといっても、U A 1とU A 3クラスでは日本語力にかなりのレベル差がある。U A 1クラスの学習者は、4月の時点ですでに高いレベルの日本語力を習得しており、会話や作文においても文法や語彙の間違いは極めて少ない。一方、U A 3の学習者の場合、入学当初の日本語能力は中級レベルである。作文においても、適切な文法や語彙を使用しているか、読んで筆者の言いたいことが伝わる文章になっているかが課題となっている。

このようなレベル差の大きいU A 1～3クラスであるが、共通点もある。それは4月の時点では、まだだれも日本語で論文を書いた経験がないということである。そして、翌年3月の修了時点までに修了論文を書くという最終目標も共通である。つまり、日本語能力の違いはあっても、日本語で論文を書くということについては、スタートとゴールは共通である。そのため、授業では、学習者に正しい日本語表現力を身に付けさせると同時に、論文を書くための指導も同時に行っていく必要がある。

では、学習者に論文を書かせる上で必要な視点は何だろうか。学習者の作成した論文の中には、一応学問的・社会的なテーマを扱っているのだが、それについて多くの情報を集めて、文章にまとめて紹介し、最後に自分の感想を付け加えるだけのものもしばしば見られる。確かに、書き言葉の表現や引用の形式など、一通り論文としての形式は整っている。しかし論文として不十分なものがある。そこにはどのような指導上の課題があるのだろうか。本稿では、上級クラスの論文の指導においては、論文特有の文章表現を身に付けさせると同時に、学習者に思考力を育てることが必要だと考える。学習者がどのような専門分野に進んだとしても、思考力は学習者が論文を作成する上で必要なものである。では、論文を作成する上で求められる思考力とはどのようなもので、それはどのように指導できるものなのか。U Aクラスにおいてこれま

で試みられてきた取り組みの紹介を通じて上級作文授業の成果と実践上の課題について述べていきたい。

この論文では、まず上級レベルの学習者に論文の指導を行う意義とは何かについて整理した上で、U A 1～3クラスの論文授業に共通する課題について述べる。次いで、各クラスの論文授業での取り組み、課題についての報告をそれぞれのクラスごとに行う。

2. 論文指導の意義

学習者に論文指導を行う上で、まず考えなければならないのは、そもそも論文とはどのようなものか、ということである。多くの引用やデータが盛り込まれ、むずかしい表現を使って書かれていれば、論文になるというものではない。論文と言えるためには、どのような条件が満たされなければならないのか。最近、大学生向けに論文やレポートの書き方について書かれた本が数多く出版されている。それらの本の中では、そもそも論文とは何かということについてどのように説明されているだろうか。

たとえば、河野（1998）によると、論文とは「問題が提起してあり、その解答が与えられていることがレポート・論文たりうる最も基本的な要件であり形式なのです。端的には、レポート・論文とは、問い—答えという問答形式でできていると言えます」とある。つまり、論文が論文であるためには、まず問いがあり、その問いに対する答えが述べられていなければならない、と言う。そして、論文を書くことは大学での学習のスタイルと密接な関係がある。大学では単に知識を身につけるだけではなく、「これまでの知識や理論、常識を疑い、それが本当に正しいかどうかを確かめる批判的検討能力や、なにが真の問題なのかを発見し、新たな解決法や対処法を見つけ出ししていく問題発見—解決能力」（河野（1998））が必要とされる。大学で問題を自ら見つけ解決していこうとする姿勢と、論文の書き方は大きくかかわっているというわけである。

また、戸田山（2002）は、「論文には次の3つの柱がある。(1) 与えられた問い、あるいは自分で立てた問いに対して、(2) 一つの明確な答えを主張し、(3) その主張を論理的に裏づけるための事実に・理論的な根拠を提示して主張を論証する」と3つの必要な要素をあげ、これを論文の定義としている。

いずれも、論文が論文であるために必要な条件として、問いに対して答えが与えられていることが述べられている。そして、これは、単に与えられた知識を身につけるだけではなく、自分で疑問を見つけ解決していこうという知的な好奇心や批判的思考を働かせるものでもある。

ここに、上級レベルの学習者に論文を指導する意義もより明らかになってくる。確かに、大学で論文やレポートを書くための準備作業という位置づけもある。だが、それだけではなく、学習者に論文を書かせる指導を通じて、大学で学ぶ上で必要な知的探求力や思考力を育てるという意義も見いだせる。そうすると論文指導とは、学習者に論文の形式や文章表現を教えるものにとどまらない。それは同時に、学習者自身の思考力を働かせる作業でもなければならなくなる。つまり、学習者が、自ら問題を見つけ、その問いに対する答えを見つけるための一連の知的作業を伴ったものでなければならない。

3. 上級クラスの論文授業の目標・課題

日本語の授業の一環として論文指導を行う場合、大学の専門の授業の場合とは違った困難さがある。まず大学の専門の授業では、学生は共通の問題意識を持っており、しかも指導する教師はその専門に十分精通している。そのため統一したテーマを設定し、そのテーマにそって長期間研究活動をしながらか、一つの論文を作り上げていくことが可能である。ところが日本語の授業として論文指導を行う場合、学習者は日本語のレベルによってクラス分けがなされているため、専門や興味・関心がさまざまな学習者が一つのクラスの中に在籍している。同一のクラスの中に、理系の学習者も文系の学習者もあり、また同じ文系でも社会科学系から文学系・芸術系など興味や関心の方向はさまざまである。そのため、クラス内で統一したテーマを設定し、それについて継続的な論議や研究活動を行うことは困難である。その上、理系と文系では論文の構成や文章表現も異なる。社会科学系の論文と文学系の論文でも、おのずとそのスタイルは大きく異なるため、学習者の書く論文は内容面だけでなく構成や形式の面でも多様化する。さらに、学習者が論文テーマとする専門の分野に教師が必ずしも精通していない場合もある。そのため、学習者の書く論文の内容面に対して必ずしも十分な指導ができるとは限らない。

このように、日本語授業としての論文指導を行う場合、学習者の多様性にどのように対応するかということが大きな課題となる。多様な学習者の専門や興味に対応すると同時に、クラス活動自体は統一的なスケジュールで進める必要がある。そのため、授業では、一斉指導と個別指導を柔軟に組み合わせることが必要になる。

だが、このような困難点は同時に授業を進める上でのメリットにもなりうる。つまり、多様な学習者が在籍していることにより、さまざまな視点からの発言が出され授業を活性化することができる。一つのクラス内にはさまざまな文化圏から来た学習者がいる。そのため、同じテーマをめぐるでも異なる視点から多様な意見が出され、活発な論議が展開される場合もある。それが学習者が意見形成をする上での刺激ともなっている。

また、日本語授業としての論文指導では、内容面でレベルの高い論文を書かせることが必ずしも第一の目標ではない。それはむしろ大学進学後の目標になるだろう。この授業で目標とするのは、学習者が大学でどのような専門を選んだとしても、論文を書くことができるための基礎的な能力を身につけさせることである。そのためにも、論文を書くことを通じて、学習者の知的探求力や思考力を育てるという視点が重要になる。大学進学前にまず、思考力を働かせて論文を一つ書いたという経験をさせることにより、大学進学後も論文を書くことができるということを想定している。

このように、論文を指導することは同時に学習者に思考力を働かせることでなければならない。そのためには、教師が授業の方法や内容面であまりに主導権を持っていては、学習者自身が知的探求力を働かせることがない。そのために学習者が主体的に意欲的に取り組めるような課題をいかに教師の側が提示するか、そして、学習者の相互交流を促しお互い学び合う刺激を与えあう場面をいかに作るか、ということが課題となる。

以下の章では、UA1～3クラスで、作文授業の中で思考力を育てる試みを、それぞれの学習者の日本語レベルに応じて、どのように行ったかが述べられる。

4. 各クラスの取り組み・課題・成果

4-1 学習項目

UAコースは、中級から上級学習者が対象となり、プレメントテストによって成績上位者から順にUA1、2、3と分けられる。

学習項目は大きく分けると、「1. 入門期」→「2. 作文から論文へ」→「3. 論文を書く」→「4. 修了論文の作成」となっている。この中から、学習者のレベルにあわせ、適宜必要な項目を取り上げている。

1. 上級作文の入門期（学習者のレベル：中級）

目的：論文を書く前段階として、日本語で書くことになれるためさまざまなトピックを日本語で書いてみる

学習項目（トピック）

クラスメート紹介	インタビューをして紹介後、書く
私の国（町）の紹介	地形、人口、文化、習慣など
私の国の歴史	過去の事実を客観的に書く
こどもの頃の思い出	経験（事実）とその時の気持ちを書く
私の趣味	どのような趣味か、なぜ好きかなどを書く
将来の夢	未来のことを書く
日本に来て～たこと	日本に来て「驚いたこと、困ったこと、うれしかったこと、悲しかったこと」など、ひとつのトピックについて書く（事実の描写とその時の気持ち、理由など）
私の国と日本	自国と日本の文化・習慣の共通点と相違点を紹介
私の国の昔話	物語を書く

2. 作文から論文へ（学習者のレベル：中上級）

目的：論文を書く準備作業として、論文の文体・形式に慣れる

学習項目

- ①論文・レポートとは何か
- ②事実を書く（1）定義・分類・手順を述べる
作文課題例：自国の代表的な料理と作り方の紹介
自国の伝統的な祭りや行事を紹介
- ③事実を書く（2）変化や経過・因果関係を述べる
作文課題例：私の生き立ち
- ④数字のデータの表現
- ⑤事実と意見を書く グラフや表を使って、自分の疑問・意見を書く
作文課題例：日本と世界の若者の家族観・人生観・国家観
（世界青年意識調査のデータを使用）
- ⑥引用文の表現

⑦問題点を指摘し、原因や解決策を考える

作文課題例：自国の問題点を説明する

⑧ある意見に賛成・反対する文章を書く

作文課題例：死刑制度・クジラを食べることに賛成か反対か

⑨批判的に読み、考える

作文課題例：自国の文化・習慣を正しく紹介

⑩客観的な立場に立って意見をのべる

作文課題例：〇〇のいい点、悪い点

3. 論文（3000～4000字）を書く（学習者のレベル：上級）

目的：学習者が自分でテーマを決め、情報を集め、論文の構成や表現に注意して論文を作成する。クラス内で発表、質疑応答後、文集とする。

学習項目（テーマ）

・日本人・日本文化の謎を探る（文献を調べる）

日本人の行動や習慣、日本文化について学習者が感じている疑問をインターネットや文献を通じて調べる。その結果を論文にまとめる

・最近のニュースを考える（2つ以上の情報源から考える）

最近のニュースについて、2紙以上の新聞（1紙は日本語新聞）を読み内容を要約して紹介。それについてコメントを書く。

・インタビュー・アンケートプロジェクト

学習者が関心を持ったテーマについて、複数または特定の人にインタビューまたはアンケートを行う。その結果を論文にまとめる。

4. 修了論文（U A 1, 2 は8000～16000字程度、U A 3 は3000字以上）の作成

①論文のテーマを決定、資料の収集および読み込み（冬休みの課題）

②テーマの発表、論文のアウトライン及び目的の作成、検討、修正

③論文の下書きの執筆、教師からの添削

④論文の完成（表紙、目次、本文、参考文献リスト、脚注付きのもの）

4-2. U A 1 クラス

4-2-1. 学習者のレベル及び学習内容

U A 1 クラスの学習者は、例年、日本語レベルは非常に高い。多くの学習者が日本語能力試験1級にすでに合格している。幼少期を日本で暮らし、日本語はほぼネイティブに近い形で身につけている者もいる。日常的なことからテーマとした作文を書かせた場合、自然な日本語に近い表現で自分の体験や気持ちを述べるができる。指摘すべき文法上の間違いも少ない。ただ、論文を書いた経験のある学習者はいない。そのため、ほぼ1年近くかけて、論文を書く指導を行っていくことができる。

UA1では、まず入門期に当たる学習項目は短期間で終了し、早くから、作文から論文を書くための橋渡しの時期に入る。5月の初めころより、論文の文体や形式に慣れる作業を行う。この時期はあまり論文の構成や引用のしかた等にはこだわらない。それよりも論文で基本となる、事実に基づいて意見を書くというスタイルを習熟させる。これまで学習者は自分の気持ちや感想を書くことはできているが、ここで自分の意見を書くという経験をする。まず、事実を伝える表現として、定義と分類、変化の形容、数量に関する表現を使った文章を書く練習をさせる。そして、事実に基づいて自分の意見を書くという作業に入る。さらに、ある意見に自分の賛成意見または反対意見を述べる文章にも取り組ませる。

9～11月期は、実際に3000～4000字程度の論文を二つ以上書かせる。テーマは大枠としては教師の側から提示するが、基本的には学習者が自由に決めるものとする。いずれも、テーマについてのブレイン・ストーミング→各自のテーマ設定→テーマについて資料・データを集める→論文を書く→論文をクラスで発表し質疑応答、という手順を踏む。論文の構成にも気を配らせる。

1～2月期は、8000～16000字程度の修了論文を作成させる。テーマは学習者が自由に決める。冬休みの宿題として、修了論文のテーマを何にするか考えさせる。修了論文は分量的にも多いため、アウトラインや下書き段階から教師がチェックして指導する。

4-2-2. 取り組みと成果、課題

UA1クラスでは、ほぼ1年間を通じて論文を書く指導を行っているが、ここでは、その中から「2. 作文から論文へ」の時期に行った「批判的に読み、考える」試み、および「3. 論文を書く」の時期に行ったインタビュー・アンケートプロジェクトの試みについて紹介する。

4-2-2-1. 批判的思考力を育てる試み

思考力を育てる論文指導の一環として、さまざまな情報源に対して批判的に考えることができる態度を育てる試みを授業で行った。論理的に考える前提として、自分自身や他の人が持つステレオタイプや偏見について認識する能力が必要と考えるからである。特に、他国の文化の見方にはステレオタイプや偏見が含まれていることが多いが、学習者は必ずしも自覚的ではない。さまざまな言論やメディアによって伝えられる情報の中には、偏見やステレオタイプが存在し、それに気がつくことができるというのは、論理的で生産的な思考を進めて行く上で必要なことである。それは、今後、学習者が多く接するであろうイメージや情報に対しても、それをただ受容するのではなく、批判的に考えることができ、その背景についても洞察を深める力を身につけることにつながる。

具体的には、学習者の国の文化がいかに伝えられているかをテーマとした。授業の題材として、『世界文化情報事典』（1991年 大修館書店）、『60か国 世界比較文化辞典』（1998年、マクミラン ランゲージハウス）、『地球の歩き方』（2007年 ダイアモンド社）を使用した。以上の書には、世界の多くの国の文化や習慣に関する説明が詳細に述べられている。特に最初の2冊には、あいさつやプレゼント、食事の習慣や話題にはいけない事柄、男女交際のあり方など、その国の国民と交際する上で注意すべき点が、国ごとに書かれている。授業では、学習者の属している国の記述をコピーして、学生に一通り読んでもらう。もちろん、その記述の内容には多く

の間違いや時代遅れになっているものもたくさん含まれている。そのため、多くの学習者が自国の文化や習慣がこのように書かれているのを知り、非常におもしろがって読む。だが、同時に事典という形で自分たちの文化や習慣が広くこのような形で紹介されていることに、驚きも感じる人が多い。知らない者が読めば、ここに書かれていることがすべて真実だと思いこむに違いないことにも気が付く。ここから、メディアや言論の中の情報をすべて真実と考え鵜呑みにしてしまうことの危険性にも気がつくことを期待している。授業内では、読んだ文章の中のどの点が誤っているか、事実と異なるかを学習者から説明してもらう。そして、事典の記述の問題点を指摘し、自国の文化を正しく紹介する文章を書いてくることを次週までの作文課題とする。

この取り組みは、多くの場合、学習者は非常に興味深く取り組む。自国の文化が外からこのように見られ書かれていることを知り、やはり新鮮な印象を得るようである。この取り組みから、メディアから得られる情報を無批判に受け取るだけでなく、その中に含まれている偏見やステレオタイプを認識する能力を身につけて行くことが期待される。そして、作文表現としては、他人の文章を引用した上で正しい事実を述べながら批判していくという文章スタイルを身につけていく。

しかも、ここで得られた態度は、その次の授業「最近の出来事・ニュースについて紹介・意見を書く」課題と密接に結びついている。この課題では、単に興味のあったニュースを紹介するだけではなく、そのニュースそれ自体を批判的に受け止めることも要求している。学習者の中にはニュースの伝え方それ自体に疑問を持ったり、批判的にとらえたりする文章を書いてくる者もいる。例えば、あるブラジルの学生は、日本で報道されるブラジルのニュースが極めて少なく、たまたま報道されたものがスキャンダラスな凶悪事件であったことに注目し、マスメディアの報道の仕方がその国についてのイメージを形成してしまう危険性について指摘した作文を書いてきた。また同じ出来事でも複数のメディアに当たり、その伝え方の違いを問題としてくる文章を書いてくる学習者もいる。このように、単に情報を調べ集めるという段階から、情報そのものを評価するという視点も身につけていくことが、この一連の取り組みの狙いである。

4-2-2-2. 自ら問題を見つけ、自ら調査・発見する。総合的な日本語運用力を身につける試み —インタビュー・アンケートプロジェクト—

インタビュープロジェクトまたはアンケートプロジェクトは、学習者のコミュニケーションを教室内だけではなく教室外の人物とのかかわりにまで拡大し、インタビューやアンケートのプロセスを体験することにより日本語の総合的な運用能力を高める取り組みである。ここでは、思考力を育てる論文作成指導の一環として、インタビューやアンケート活動を行った。つまり、前述したように論文とは、自分で疑問を見つけ、その疑問に対する答えを自らの力で見出していこうという知的な作業が伴うものでなければならない。学習者自らが現実を対象とした調査を実施し、その結果を自分なりにまとめ分析するというのは、知的な作業に不可欠な過程と考えられる。

また、この試みを取り入れた狙いとして、学習者に調査研究活動の面白さを体験させたいということがあった。この論文授業を担当する10年近くの間、学習者をめぐる研究教育環境は大きく変化した。かつてはテーマに関わる文献を見つけるのに図書館で苦勞して探したり、必

要なデータ一つを見つけるのにもかなりの時間と努力を必要とした。ところが、最近はインターネットの普及により、テーマに関わる情報は即座に手に入り、それらの情報を集めれば論文らしい体裁のものは容易に仕上げることができる。そのため、わずか一日または一晩で論文を書き上げてくる学習者も見られるようになってきた。そこで、もう一度研究活動の原点に立ち返ってみようと考えた。インタビューやアンケートの調査対象は文献やインターネットとは異なり、現実そのものである。しかも、どのような結果が出るか分からない。そして、その結果をどのように分析するか、そこからどのような結論を導き出せばよいのか、学習者は自分で考えなければならない。何かの文献を参照すればすぐ分かるというものでもない。困難だが、その分、学習者は非常に興味深く取り組む。それまであまり意欲的ではなかった学生も、この取り組みでは積極的な姿勢を見せることもある。やはり、質問紙を作るところから自分自身が企画して行い、最後に論文に仕上げることで一定の達成感が得られるからであろう。また、U A 1の学習者にとっては、教室内だけの座学中心の学習ではなく、教室外で実際にさまざまな対話をしながら情報を得るといった点が新鮮だったようである。

基本的には次のようなプロセスで授業を進めている。

- ①テーマについてのブレイン・ストーミング
- ②学習者が決定したテーマ・質問項目の発表、それをクラス全体で検討
- ③インタビューまたはアンケートの実施
- ④インタビューまたはアンケートの結果を論文にまとめる作業
- ⑤完成した論文の発表・意見交換

まず、インタビュー・アンケートプロジェクトの概要について説明した上で、日頃疑問に思っていること、調べてみたいこと、インタビューやアンケートをしてみたい相手や事柄を自由に出し合う。自由に出し合う中で、学習者は徐々に自分のやりたいテーマは何か絞られてくる。次週までに、テーマの決定、インタビューまたはアンケートの質問項目を考えておくように伝える。そして、各自が決定したテーマや質問項目についてクラス全体で検討する。質問項目や選択肢が適切かどうか、自由回答の形式がよいか選択肢から選ぶ形式がよいかなどの検討を行う。他の学習者からも質問項目の追加や修正の提案などが行われ、その過程の中で自分は何を調べたいのかという調査の狙いも明確にさせていく。そして、2週間ほどかけて学習者は実際にインタビューまたはアンケート活動を行う。

これまで学生が選んだテーマとしては次のようなものがある。

- ・インタビュープロジェクトの例
 - パイロットのライフスタイル・仕事観
 - 異文化に暮らす一人の日本人女性の人生観・日本観・韓国観
 - モンゴル人学生の視点から見た日本
 - 日本人の宗教観
- ・アンケートプロジェクトの例
 - 文化による色彩イメージの違い
 - 国による学歴意識の違い
 - 国際結婚に対する意識
 - 韓国に対するイメージ

この調査を行う上で、学習者は非常に多様なテーマを選んでくる。調査の方法や対象者もさまざまである。対面インタビューだけではなく、メールを通じたインタビューも行われる。アンケートの対象者も日本人学生のみ、留学生のみ、日本人と留学生の双方と、調査の狙いに応じてさまざまな方法が選ばれる。特に、日本語日本文化教育センターには、世界各地から来た留学生が集まっている。その点を利用して、さまざまな国や文化による考えや意識の違いを調べることができる。使用言語は、自分の家族や同じ国の友人へのインタビューの場合を除いて、すべて日本語である。この作業では、かなりの部分、学習者の自主性にゆだねている。アンケートの方法も、友人を通じてアンケート用紙を配布したり、チューターの協力を仰いだりと、かなりの部分教師の手を借りずに行うことができている。ただ、アンケート用紙については必ず事前にチェックを行う。アンケートの目的や調査実施者の所属や氏名など必要な項目は書かれているか、アンケートを目的外に使用しないことを明記しているか、質問項目は適切かなどを見る。

そして、調査が終われば、その結果を分析し論文にまとめるという作業に移る。本来の調査活動ならここでデータ分析の方法についての指導が必要なところである。だが、この授業の狙いは社会調査の技法を習熟することではなく、あくまで、自分の疑問を自分で調査し、その結果を自分で分析することである。そのため、データ分析の方法についてはあまり細かい指導は行わない。また、最近の学生はパソコンの使用法について十分習熟している。多くの学習者はすでにエクセルの使用にも通じているため、グラフや表の作成も自分で行うことができる。最後に、学習者が論文にまとめたものを授業で発表し、学習者同士や教師との間で質疑応答をしながら意見交換を行う。

この取り組みによる成果としては、学習者自身が自ら調査し、その結果を自ら分析するという体験を得ることである。この過程はこれから学ぶ大学で求められる学習・研究スタイルでもある。単に与えられた知識や学説を受け入れるだけでなく、自分で調べ自分なりの結論を出していく作業は、知的探求力の育成につながる。そして、日本語能力の総合的な育成にもつながる。情報収集における聞く・話すというコミュニケーション力、データを分析しその結果を文章で表現する能力など、いずれも今後の学習研究活動に必要な日本語能力である。さらに、学習者自身の進路選択や人生選択にとっての刺激にもなる場合がある。長時間、質問する機会がない人に対しても、授業で論文を書かなければならないということになれば、それをきっかけにインタビューを頼むことができ、また相手も快く引き受けてくれる場合が多い。インタビュープロジェクトを行った学習者の中には、自分の母親にこれまでの人生の歩みを聞いたり、自分の憧れの職業のプロの人に質問を試みた者もいる。しかも、その結果を論文の形でまとめなければならぬため、自分の気持ちや考えも整理しなければならない。そこから、改めて異文化の狭間で生きる自分の生き方を考える者、自分の職業選択について思いを深くした者もいる。

注意しなければならないのは、短期間で行う個人的な調査のため、当然、調査対象に大きな偏りがあることである。学習者によっては40名を対象としたアンケートを実施した者もいるが、それでも制約は免れない。だが、このプロジェクトで最も大事にしたいのは、自らの力で調べ考えるという過程そのものである。調査そのものの厳密さを要求したら、学習者は意欲を失ってしまう。したがって、調査方法に関してはできるだけ柔軟な態度で臨み、あまり細かい問題点の指摘をしないようにしている。だが、調査としては限界があるのは確かなので、そこから導

き出される結論は安易に一般化できないことは学習者に伝えている。

今後のこの取り組みの発展の可能性として、アンケート調査とインタビュー調査、そして文献調査を結びつけた活動が考えられる。これまでの学習者の中には、この調査で内容の深い論文を書き上げたものの、その成果が必ずしも次の作文課題に生かされない場合もしばしば見られる。一つのテーマをめぐって、ある程度、継続的な研究活動・論文執筆を行うことも今後の可能性として考えられる。アンケート調査を実施すると同時に、そのテーマに関わる研究論文も調べ、データを分析する際の参考にすることもできる。また、アンケート調査とインタビュー調査を組み合わせることも考えられる。これらの活動を組み合わせることで、総合的な日本語力の向上とともに、思考力を深める訓練にもなることが期待できる。

4-3. UA2クラス

4-3-1 学習者のレベル及び学習内容

UA2は、日本語上級学習者が主となるが、年度によっては、中級レベルであったり、日本語で表現すること自体に慣れていない学習者が入ることもある。また、上級ではあっても、日本語の作文はあまり書いたことがなかったり、日本語の文章スタイルをあまり意識していない場合もある。そこで、「上級作文の入門期」からスタートし、「2. 作文から論文へ」、「3. 論文を書く」を経て、1~2月期にUA1同様「4. 修了論文の作成」に至る。「3. 論文を書く」は、進度によって1本になったり、2本になる場合もある。最終課題はUA1と同様なので、授業内容もUA1とほぼ同様の場合もあるが、この項目では、UA1と異なる部分を中心に「入門期」から述べる。

「入門期」に入る前に、まず最初の授業で行うことを述べる。ガイダンスでは、大まかな年間スケジュールなどとともに、この授業の目標として「日本語表現力をつける」「思考力を深める」という2点をあげる。「日本語表現力をつける」方法は、一般的な作文授業で行われていることと同様、表現を学んだり、実際に書いてみて使ったり、誤用を分析することなどである。「思考力を深める」ための方法は、教師から提示されるものだけではなく、クラス内ディスカッションがあることを提示している。特にディスカッションは、お互いの意見を述べ合うことにより、そこから異なる考え方を理解したり、新たな観点を発見したり、意見を交えることによってより深い考え方に至る方法となることを理解させ、授業への積極的な参加を促す。授業の進め方は、作文を書くことは宿題とし、授業では書いてきたものを発表し、それをもとにディスカッションを行う。「何かを書く」ということは、日記などを除きほとんどの場合「読み手」が存在すること、ゆえに「読み手の立場にたって書く」ことが最終的には重要になる。従って、発表することによって、「読み手」の反応がすぐに確かめられるだけでなく、自分自身が「読み手」となることによってどのように書けばよいかを考える機会ともなることを示し、発表とディスカッションの意義を理解させている。

4-3-2 上級作文の入門期

「入門期」は、まず「書くことに慣れる」のが第一目標となるが、それだけではない。「2. 作文から論文へ」以降で重要になるクラス内ディスカッションが円滑に行えるようなクラス作りも重要である。

毎回の授業の進め方は、「先週の宿題を各自発表、それについてのクラス内ディスカッションやコメント」→「文法事項や表現のフィードバック」→「次回取り上げるトピックについての説明など」となっている。文法事項や表現のフィードバックは、その週の作文課題についてだけでなく適宜行う。

「作文の発表」は、この段階では、各自が書いてきたものをクラスみんなの前で読み上げている。「作文」は本来「読まれる」ことを想定したものであるため、内容が複雑になってきた場合には発表方法は「お互いの作文を読み合う」という方法も取り入れている。「読む」ということは、「書き手のメッセージを受け取る」「音声言語ではなく書かれたもので受け取る」ということで、音声言語でメッセージを受け取る「聞く」とことは本質的には異なる。作文や論文は、読み手が自分のスピードで、時には読み返したり、読み飛ばしたりしながら、書き手のメッセージを受け取るのが本来の姿である。「聞く」のでは、この時点での学習者の日本語レベルでは、だいたいの内容を理解するのに精一杯で、論理展開まで検討できない。しかし、この段階では、内容がさほど複雑ではない、書かれたものがハンドライティングで読みにくい、読むスピードの個人差がかなりある、しかし書いたものをみんなの前で発表することは反応をすぐに確かめられるメリットがある、といったことを勘案し、口頭発表としている。しかし、「目で確認したほうがいい」ものなど一部の作文は、教師がPCで打ち直しコピーし、次週配布することになっている。目で良い点を確認できると、次は自分ももっといいものを書こう、という動機づけにもなる。

入門期で取り上げる作文のトピックは、前述のように一般的なものである。しかし、「子どもの頃の思い出」は、悲しかったこと、恐かったこと、うれしかったことなど、お互いの話に感情移入をしやすい。家族愛や友情など誰もが似た経験を持っていることを通し、共感する。また、個人的な経験を知ることによって、「まだあまり知らない、だけど興味がある」クラスメートが少し身近な存在になる。

「私の国の紹介」では、学習者がお互いの国をあまり知らず初めて聞く話も多く、興味関心が広がり、作文以外の質問が出ることもある。知らないことに対する好奇心を持ちつつ、どのあたりまでなら聞いても大丈夫かと少し遠慮しつつ、しかしどんどん質問をしている。「子どもの頃の思い出」などのプライベートなことよりも一歩踏み込んだ質問が可能であるし、この授業での質問がきっかけとなり、休み時間にさらに話が膨らんでいることもある。こうして、学習者相互の距離を縮めていっているようである。

「私の国の歴史」は、客観的な事実を書くので自分の個人的なことよりもむしろ書きやすい。読み手（この段階では「聞き手」）にとっては「世界史で勉強したから少しだけ知っている」ことが、自分の知っているクラスメートの口を通し、より身近なものとなる。しかし、時には悲惨な内容であったり、学習者のお互いの国が支配・被支配の関係だったりすることもある。他の人の作文を聞いて「実は私の国も（～さんの）国に支配されていた」などといった感想がでることがある。支配者側だった国の学習者の率直な謝罪や感想が、被支配者側のわだかまりを溶かす場合もある。また、第三者からの「自分の国にも同じようなことがあった」などの感想が、自分の国だけではないことを知り、客観化させる契機となる場合もある。これらのことを通して、互いへの興味関心が高まったり、相互理解が更に進む。

まずこの時期には、自分の感想を表現できることだけでなく、感想を率直に言い合える関係を築くこともひとつの大きな目的となっている。なぜなら、この関係が、より複雑な問題につ

いてディスカッションが行える下地となるからである。

4-3-3 作文から論文へ

この段階では論文で使われる表現を学習することが主になるが、それ以外に、論文の構成や段落などにも気を配って文章を書くことが求められる。

入門期では、段落や構成を特に意識せず書きたいことを書いていたが、段落や構成を考えることは、論理的な思考力につながる。つまり、書きたいことであっても、それが論文全体の流れとして必要でなければ書くべきではない。したがって、何を書き、何を書かないか、どの部分を1つの段落とするか、など、持っている材料を目的にあわせて整理し、段落を作り、順番を考えて書く、ということが必要になってくる。授業は、『アカデミック・ジャパニーズ 大学生・大学院生のための日本語4 論文作成編』などを使用する。表現面での練習が主になり、作文課題もこの本の例題を使うことが多い。学習者の作文は似たような内容となるが、それぞれの作文を読む段階では、読み手として表現や、段落、構成に注意を向けやすいというメリットがある。

また、この段階で、あるトピックに関して賛成・反対を表明する意見文を書くが、これは重要な作文課題となる。まず授業内で、ブレイン・ストーミングを行ったり、思考マップを使って観点を整理した後、宿題として賛成・反対意見を書いてくる。特に「死刑制度に賛成か、反対か」は、学習者が飛躍的に伸びる契機となる場合が多い。

「死刑制度の賛否」については、自分の国でディスカッションをしたり、母国語の作文でも書かされたりしている学習者もあり、学習者がそれぞれ賛成・反対の意見を持っている。自分の国の文化や宗教の影響を大きく受ける問題であり、なぜ賛成なのか、なぜ反対なのか、異なる立場が全く理解できない場合もある。しかし、全く理解できないと思っても、それが信頼できるクラスメートからの発言であれば、理解してみる努力をしようという気持ちになり、宿題として持ち帰った時にインターネットで調べてみる。様々な意見やデータを調べ、再考することによって、意見が変わったり、揺れたりする場合もあるが、自分と異なる意見も熟考した上で、元の意見となる場合もある。いずれにしても、自分のそれまでの考えを一度疑ってみた上で出した結論である。

書く段階では、「説得力のある文章」にするため、情報を整理し、必要な情報を適切な順番に並べた作文として仕上げてくる。元々知的能力の高い学習者が多いため、緻密に論理を構築してくる場合もある。この作文課題よりも前の作文課題で緻密に書かれた他の学習者の作文を読んで、今度は自分も、と思って書いている場合もある。他の学習者の作文を知ることが、いい相乗効果を生んでいるのである。

作文を次回の授業で発表するが、そこで興味深いことが起きる場合もある。例えば、自分の主張に客観性を持たせるためにデータを利用するが、「死刑を廃止したら犯罪が増える」という実証データを出す者もいれば、「死刑を廃止しても犯罪は増えない」という実証データを出す者もいる。このように相反するデータが出てきた場合、データそのものに対する信頼性の検証が必要であることを知り、データを批判的に読むことにもつながるのである。

なお、作文はこの頃はPCで作成している。発表方法は、口頭発表となる場合もあるが、データがあり論理展開が緻密なため「読む」場合もある。「読む」場合は、それぞれの作文をコピー

したものを黙読している。「読む」段階では、文法の正誤はあまり気にせず、「意見」や「なぜそう思うか」ということだけでなく、論理的に飛躍がないか、複雑なことでも理解しやすく書かれているか、という点も読み手として考えながら読むことが求められている。

4-3-4 論文(3000~4000字)作成

この時期には3000~4000字程度の論文を書くが、その中の1つに「最近のニュースを考える」という作文課題がある。学習者は、経済、経営など社会科学系に進学予定の者でも、意外に日本のニュースを知らなかったり、新聞を読まなかったりする。そこで、新聞を読んでコメントをする作文課題を与えている。条件は、2紙以上を扱うこと、1紙は日本の新聞とすること、この2紙を比較してもいいし、2紙から得られた情報をもとに考えたことを書いても良い、としている。トピックは、日本国内に限らない。書くための期間は通常より長い2週間程度としている。元々、引用や要約、比較などの表現技術を使うために始めた課題だったが、意外な効果を生んでいる。

学習者がまずぶつかるのが、日本の新聞を読むことである。この時期には日本の新聞を読みこなすだけの読解力は十分あるが、自分から日本の新聞を読むことは少ない。中には自分の国の新聞すら読まない学習者もいるので、「日本の新聞を読む」こと自体が新しい知的経験となる場合もある。次に問題となるのが「何を選ぶか=何を選んだら書けそうか」ということである。「おもしろそう」と思っても、その感想以上のものが出てこなかったり、考えが深められない場合もある。そうすると、新聞の記事探しからやり直す場合もある。ここで、「論文を書く」ためには「テーマ設定」が重要になることに気づく。

この課題の「2紙」という点がまた重要である。同じトピックでも、新聞によって扱われ方が異なる点に気づくと、興味を持ち始める。特に、日本と外国の新聞の場合、そのトピックの取り上げ方や情報量の差をはじめ、どのような点を重視して報道しているか、どのような観点で評価しているか、など大きく異なる。その違いに気づくと、「おもしろい」で終わる場合もあるが、「なぜ、そのようなことが起きるのか」という点に及ぶ場合もある。論文を書く段階ではそこまでいなくても、論文を発表する段階で、ディスカッションの中から出てきて、全員で考える契機となる場合もある。発表後、「日本と外国とでは、全然違うことを問題にしているからおもしろい」「(自国と日本の新聞を読んで)自分の国以外の新聞も読んだほうがいいと思った」「(2紙のうち、片方には書かれていない情報があるのを見て)いくつかの新聞を読むことの重要さがわかった」などの感想を述べている。このような過程を経て、新聞を読むことの大切さや、複数の情報源を持つことの重要性、母語以外の言語を使うことによってより多くの情報や観点を得られるメリットなどを感じているようである。

4-3-5 今後の課題

以上、見てきたことをまとめると、思考力を深めるための方策として、主に3点、作文課題、教師からの働きかけ(ブレイン・ストーミングや思考マップ、段落や構成、フィードバックなど)、学習者同士のディスカッションがある。この中で、UA2の授業の進め方で最も重視しているのは、クラス内ディスカッションである。従来の「教師のみが学習者の作文を評価する」といった関係では評価は1つだけだが、学習者間の横の関係も取り入れることにより、多様な

反応を受け取ることができ、それが学習者を勇気づけることもある。さらに、様々なバックグラウンドを持った学習者たちがディスカッションを通して、それまで自分が当然と思っていたことが当然ではないことを知り、異なる観点に遭遇し、時には自分の中に変化が生じたり、お互いの観点を出し合い検討することによってクラス全体で新たな考え方を構築していく場合もある。ディスカッションが活発に行われたクラスの学習者評価は、「楽しかった」「他の人の考え方がわかって楽しかった」「予習や宿題をよくがんばった」「よく考えた」「(コースの)初めのころととても変わった」など好評だった。また、作文自体も、お互いのものが刺激となり、大きな飛躍を遂げていた。

ディスカッションが活発なクラスは、クラスダイナミズムによって、より良い効果を生むようである。教師としては、入門期から、「こんなことを言っても笑われない」「こんなことを聞いても大丈夫」と思えるように、トピックの選定やクラスの雰囲気作りに気を配り、「ディスカッションが活発になるように」腐心をする。しかし、いかに気を配っても、必ずしも成功するとは限らない。日本語授業を文法学習と考えていて、最終試験で1点でもいい点をとるための勉強に躍起となってそれ以外のことに否定的であったり、読み手として成長することは書き手として成長することにもなることが理解できず、教師が教えることのみが正しいことだと考え、発表やディスカッションに否定的な学習者もいる。さらに、性格的に話し合いが苦手だったり、お互いをライバルとしか見られない場合もある。このような場合、ディスカッションに限られた一部の人の一方通行になってしまったり、時には、沈黙がクラスを覆う場合もある。このようなクラスでは教師一人の働きかけでは限界があるが、それを打開する効果的な方法は、まだ見つかっていない。

4-4. UA3クラス

4-4-1. 学習者のレベル及び学習内容

UA3は、例年、約半数の学習者が日本語能力試験2級に合格しているが、作文(日本語でまとまった文章を書くこと)については、未経験、または、わずかな経験しか持たない学習者が大部分である。いずれの学習者も文法的な誤りは多く見られ、年間を通じて十分なフォローが必要である。また、日本語で文章を書くことにも慣れていない。したがって、論文を書く指導に入る前に、その準備段階である入門期に、より多くの時間を割く必要がある。

年間の学習項目は、「1. 入門期」→「2. 作文から論文へ」→「4. 修了論文の作成(3000字以上)」となっている。なお、UA1、2で行われている「3. 論文を書く」は、時間の都合上行っていない。

UA3では、これらの学習項目を通して「思考力を深める」試みを行う際に、以下のような考慮すべき点がある。

まず、UA1、2と比較して授業を行う期間が短いという点である。UA1、2の場合は作文などの技能別の授業は4月から開始するが、UA3では、技能別の授業を行う前に、中級文法の復習が行われる。そして、復習終了後に技能別の授業へと入って行く。技能別の授業が始まる時期は年によって異なる。例えば、2010年度の場合は、6月初旬であった。このような事情から、UA3の場合は、「1. 入門期」から「4. 修了論文の作成」までをより短期間で終わらせる必要が出てくる。

次に、「1. 入門期」や「2. 作文から論文へ」の期間では、「日本語表現や構成などの技術面」に十分な時間を割きつつ、「思考力を深める」必要があるという点である。このクラスの学習者は、日本語で論文を書いた経験がないだけでなく、作文についても、書いた経験がないか、あるいは、あっても経験はそれほど多くない。したがって、技術面についても、作文と論文の両方の指導が必要となり、その分学習項目は多くなる。

これらのことから、UA3では「より短期間で、日本語表現などの技術面にも比重を置きつつ、思考力を深める」ことが必要となる。

以下では、「思考力を深める」ための重要な期間である「入門期」と「作文から論文へ」について述べる。

4-4-2. 入門期

入門期には、中級文法終了後から7月下旬ごろまでをあてている。授業の進め方は、「前回の授業で回収した宿題の返却、フィードバック」→「前回の授業で課した宿題の発表、それについてのディスカッション」→「新しい表現を学ぶ」→「次回のトピックに関する説明、それについてのディスカッション」となっている。なお、作文を書くことは宿題としている。これは、各自のペースで書いてもらうためである。

この期間の目標は、「自分の考えを口頭で述べられるようになる」とことと「まとまった文章を書くことに慣れる」ことの2点としている。

「自分の考えを口頭で述べられるようになる」ためには、それぞれの学習者がディスカッションなどの際に発言することとなるが、このクラスではそれ以前の段階として、「日本語で発話することに慣れる」ことから始める場合もある。学習者の中には、日本語を話すことに慣れておらず、自信がないものもいる。そのため、易しい質問から始めて自信をつけさせ、その後、徐々に自分の考えが述べられるようにする。例えば、「私の趣味」の場合、「どのような趣味か」や「なぜ好きか」などを尋ねる前に、まず、「趣味（好きなこと）はありますか」や「私（教師）は～が好きですが、みなさんは好きですか」のような「はい、いいえ」で答えられるような質問から始める。すると、学習者は、それらの質問を出発点として、少しずつ趣味について話すようになる。

「まとまった文章を書くことに慣れる」ために、次の2点に注意を向けている。

一つ目は、「まとまった文章を書く」ために、表現とモデル文が示されているテキストを使用するようにしていることである。まとまった文章を書く機会のなかった学習者が、そのような文章を書くためには、表現について学ぶことはもちろん、その表現を用いてどのような文章が書けるかも示す必要があると考えたからである。このようなテキストとしては、例えば、『表現テーマ別・にほんご作文の方法〈改訂版〉』などがあげられる。

二つ目は、「書くことに慣れる」ために、毎回の授業で課題を課していることである。なぜなら、慣れるためには、実際に「書く」作業を経験することが必要だと考えるからである。

また、この期間は「思考力を深める」ための準備期間としても大切な役割を果たす。上記の目標のもとに授業を行っていくと、学習者に変化が見られるとともに、その変化は「思考力を深める」ための準備へとつながっていく。

まず、作文の内容が変化する。初めは、「日本語で書く」ことにのみ注意を向けており、他者

への意識は感じられないことが多い。しかし、授業内での発表やディスカッションなどを通して、「みんなに楽しんでもらうために書く」というように、「他者に伝える」ことを意識した内容に変化していく。例えば、「私の国の昔話」では、聞き手が興味を持ちそうな昔話を選定したり、聞き手に伝わりやすい文章表現を考えたりするなどの工夫が見られた。

次に、作文の内容に変化が現れると、聞き手もその内容に興味を持つようになる。初めは、日本語を口にするに自信がなかったものも、徐々に発話が増えるようになり、その結果、活発な意見交換が行われる機会が増えてくる。そして、それとともに、学習者のあいだに、意見交換を行うことを肯定的に受け止める雰囲気が出るようになる。

さらに、意見交換の結果、その興味は、発表者個人だけでなく、発表者の国や文化などへも及ぶようになる。また、意見交換を通して、自分や自分の国とは異なる価値観や状況が存在することを意識し始める。

以上のように、入門期を通じて、学習者は今までとは異なるもの（価値観など）の存在を意識することとなるが、これは、「思考力を深める」ための準備段階として大切なことであると考えられる。なぜなら、「思考力を深める」ための大切なことの一つに、例えば、自己がこれまで獲得してきたものとは異なるものに接するなどして、今まで意識しなかったものごとに気づくことがあると考えるからである。

4-4-3. 作文から論文へ

「作文から論文へ」には7月下旬から11月までをあてている。進め方は入門期と同様であるが、扱う題材は異なる。入門期には身近な話題が中心となるが、この期間では社会的なテーマが中心となる。

この期間の目標は、「インターネットなどで資料を集める」→「資料に基づいて事実を説明する」→「事実に対して自分の意見を根拠をあげながら述べる」という一連の作業が行えるようになることである。これらの作業はテキストを用いながら行った。なお、テキストについては入門期同様、表現とモデル文が示されているものを選択した（例『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』）。

以下では、この期に行った作文課題のうち、「入門期での『気づき』を発展させる試み（自国の問題点）」と、「客観的な立場に立って意見を述べる試み（よい点と悪い点を考察し意見を述べる）」について述べる。

4-4-3-1. 入門期での「気づき」を発展させる試み（自国の問題点）

「入門期」では、身近な話題を通して、今までとは異なるものの存在を意識するようになった。ここでは、身近な話題からさらに範囲を広げて、社会的なテーマのもとで今まで意識しなかったことに気づく取り組みを行う。これを行うのには3つの理由がある。

一つ目は、「思考力を深める」ことに関して、「入門期」から「作文から論文へ」の橋渡しを行うためである。「思考力を深める」ために、「今まで意識しなかったことに気づく」ことは重要であると考えるので、「入門期」で行った経験をもとに、この経験を「作文から論文へ」でも行おうと考えたのである。

二つ目は、より深く考えるきっかけを与えるためである。「入門期」では、「今まで意識しな

かったことに気づく」ことまでを行ったが、「作文から論文へ」では、気づくだけでなく、その先（例えば「なぜ」という疑問を持ち、それについて考える）へ進む必要がある。したがって、そのような「思考力を深める」ためのきっかけを作るためにこの取り組みを行うこととした。

三つ目は、視点を変えることにより、新たな発見があることを伝えるためである。「入門期」では、身近な話題のもとでの気づきであったが、社会的なテーマという別の視点に立つことにより、入門期には気づけなかった角度から他国を知ることができるのではないかと考えたのである。

この課題では次のような宿題を出した。自国の問題点を1つ取り上げて説明し、その原因や解決策などを書いてくるというものである。対象を「自分の国」としたのは、2つの理由がある。一つは、自己と他者との違いを認識するためには、まず、自分側のことを知る必要があると考えたからである。もう一つは、資料の点で、母語で書かれたものも使用できるようにすることで、学習者の負担が軽減されるのではないかと考えたためである。期間は1週間とし、翌週に発表、ディスカッションを行った。なお、この課題は「因果関係」の表現を学習した際に課したものである。

自国の問題として取り上げられたものには、例えば、「頭脳流出」や「オンラインゲーム依存症」があった。この課題を通して、学習者は、まず、自国に存在する問題について知るとともに、他国にも様々な問題が存在することに気づく。次に、他国の問題には、自国の問題と同じものや異なるものがあることを知る。ここで、今まで意識しなかったことに気づくようになるのである。

さらに、上記のような「気づき」のもとに、次のような「思考力を深める」ためのディスカッションが行われた。他国の問題が自国と同じ問題である場合は、自国と他国の問題の共通点、相違点が話し合われた。また、他国の問題が自国と異なる問題である場合は、そのような問題が生じた原因について話し合う場面も見られた。さらに、他国の問題が自国と同じ場合、異なる場合のいずれにおいても、解決策に関する話し合いが行われた。

この他、身近な話題のときには共通点あまり見いだせなかった国々が、社会的なテーマのもとでは同じ問題を抱えているなど、意外な共通点が見えてくることもあった。この課題を通して、学習者は互いの国を新たな視点でとらえることができたようである。

4-4-3-2. 客観的な立場に立って意見を述べる試み（よい点と悪い点を考察し意見を述べる）

この試みでは、『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』のレポート例「マスコミをどのように利用すべきか」をモデル文として使用している。このレポート例のアウトラインは以下のようにになっている。

マスコミをどのように利用すべきか

I 序論

「マスコミ」とは何か

II 本論

「マスコミ」の影響

1. 「マスコミ」の影響のよい面

2. 「マスコミ」の影響の悪い面

Ⅲ 結論

「マスコミ」をどのように利用したらよいだろうか

『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』より

このレポート例を用いた理由は2つある。一つは、このレポート例を通して、意見を述べるためには、客観的な立場に立つ必要があること、そして、客観的な立場に立つためには、得た情報を鵜呑みにせず、広い視野で総合的に見たうえで、よい面、悪い面などを自分で判断する必要があることを知り、経験してほしいと考えたためである。もう一つは、論文形式（序論・本論・結論・参考文献）で文章を書く経験ができると考えたためである。U A 3では時間の都合上「3. 論文を書く」を行わないため、修了論文の前に論文形式で文章を書く機会がない。したがって、このレポート例に沿って文章を書くことで、その経験をしようと考えたのである。

この課題の全体的な進め方は「テーマの決定、資料を集める」→「問題規定文（「問い」と「答え（自分の主張）」）とアウトラインを書く、発表」→「論文を書く」→「発表、ディスカッション」となっている。なお、問題規定文を作るのは、自分が何を問題点としてとらえ、それに対してどのような主張を行うのかを意識させるためである。また、具体的な方法は次の通りである。タイトルは「（ ）をどのように利用すべきか」とし、何について考察するかは各自が選択することとした。内容については、レポート例と同様、Ⅰ～Ⅲの全てを書くこととした。また、学習者が必要だと判断した場合は、新たな項目を加えることを認めた。なお、長さは2000字程度とした。

上記のように行ったところ、タイトルは、例えば、「バイオ燃料をどのように利用すべきか」「インターネットショッピングをどのように利用すべきか」など、各人の興味に応じて選択されていた。また、他者の選択したものについても興味を抱いていたようである。内容については、アウトライン等の発表の際に、さらに分かりやすくなるよう互いに提案し合う場面も見られた。

「Ⅱ本論」では、客観的な立場に立つために必要な過程（「情報を得る」→「得た情報を総合的に見る」→「よい面、悪い面を自分で判断し整理する」）を経験することができた。これにより、客観的な立場に立つためには、思考力を働かせる必要があることを改めて感じる事ができたのではないだろうか。また、「よい面、悪い面を自分で判断し整理する」ことに関して、ここでは文章化する必要があり、また文章化する際に、なぜそのように判断したのかという理由も示す必要があった。自分の考えを文章化することにより思考力を深めることができただけでなく、理由を示すことにより、一つ一つの内容についてより丁寧な考察が行えたようである。

「Ⅲ結論」では、学習者によって内容に差が見られた。よい点、悪い点を見たとうえで、どのようにすべきかを具体的に述べ、十分に思考を深めた跡が伺える文章を書いている学習者もいた。しかし、その一方で、「よい面を伸ばし、悪い面を減らす」に近いような抽象的な意見にとどまる学習者も見られた。このような学習者について、確かに、論文の形式で文章を書くことは初めての経験であったので、「書く」ことだけで精いっぱいになり、考えることにまで注意が及ばない部分もあったと思われる。しかし、原因はそれだけではなく、「作文から論文へ」などで思考力を深めることが十分に身につけていなかったことにもあると考えられる。したがって、

今後は、このような学習者が少しでも思考力を深められるような作文課題を選定するなどの工夫が必要となる。

4-4-4. 今後の課題

思考力を深めるために、今後は、作文課題の選定に気を配ることが必要だと考えられる。これには二つの理由がある。

一つは、「日本語表現の習得を通して思考力を身につける」ことを可能にするためである。例えば、因果関係の表現を学んだ際に、地球温暖化の原因を考察するという課題を設定するなど、新しく学んだ表現を文章の中で生かすことができ、かつ、思考力を深められるような課題を設定すれば、技術面と思考面での両立が図れることになる。また、このような課題を設定すれば、短期間であっても、学習者に思考力を深める機会を多く与えることができるので、結果として、4-4-1. で指摘した、「より短期間で、日本語表現などの技術面にも比重を置きつつ、思考力を深める」点を考慮することにもつながる。

もう一つは、学習者間で「思考力を深めること」に対する認識の差があるためである。学習者の中には、この授業を通して、「思考力を深めること」の楽しさや重要性に気付き、その考えを文章で表現することに喜びを感じる学習者もいる。しかし、その一方で、技術面の習得には熱心であるが、「思考力を深めること」には、技術面の習得ほどの意義を感じていない学習者もいる。このような認識の差を少しでも埋めるため、学習者の思考力をより活性化させるような課題の検討が必要になる。

5. おわりに

大学進学前の1年間の予備教育を受けている上級日本語学習者の作文授業で、大学進学後に必要となる論文作成のためにいかなる能力が必要で、それを授業内でいかに身につけさせるかについて検討してきた。論文特有の表現だけでなく、論理的な思考力を深めるために、各クラスでは以下のような取り組みを行っていた。

コース開始当初から高い日本語能力を身につけているUA1クラスは、1年間を通じ論文指導を行っている。その中で、今回の論文では、自国が事典の中でいかに紹介されているかを通して批判的思考力を養成する取り組みと、自分で問題設定をして問題解決のために文献やインターネットを調べるだけでなくアンケートやインタビューを行うことにより自らの力で調査し分析する取り組みを紹介した。論文を書くことが同時に自分で疑問を見つけ解決していこうという知的探求力や思考力を育てることにもなる試みを行っている。

日本語中上級学習者ではあるがUA1よりも書く手当が必要なUA2クラスでは、身近なトピックを書くことから始める。1年間かけて思考力を深めるための方策として、教師からの働きかけ、作文課題、ディスカッションを取り入れている。ディスカッションを取り入れることによって、学習者は異なる視点に遭遇し、考え、時には新たな考えを構築することもある。また、発表することにより読み手の反応を知るだけでなく、自分自身も読み手となることで読み手の視点が理解できる。作文課題の内容は、学習者の相互理解を進めるだけでなく、学習者の思考力に直接働きかける場合もあった。

日本語能力が中級レベルで上級文法未習のUA3クラスでは、作文にかける時間が短いとい

う制約がある。「自分の考えを日本語」で産出し、「まとまった文章を書くことに慣れる」ところからスタートするが、その中で、他者に伝えることや異なる価値観を意識するようになる。これは思考力を深める準備段階でもある。「自国の問題点」という作文課題では、問題点を見出しその原因や解決方法を考えることは、意識しなかったものを意識し、深く考え、新しい視点を獲得するきっかけとなるとともに、自分を知り、他者を知ることにもつながる。また、意見を述べるために必要な「客観性」を獲得するために、集めた情報をいい点、悪い点に整理し、それをもとに判断するという作文課題を行っていた。さらに、U A 3 は時間的制約はあるが、表現練習の中でも思考力を養う方法が示唆された。

今回、学習者のレベルに応じて、思考力を深めるためのいくつかの実践を紹介したが、それらについて今後の課題も指摘された。また、修了論文に関しては、ほとんど触れていない。これらは今後の課題とする。

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2002)『大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』アルク
- 池田玲子・館岡洋子 (2007)『ピア・ラーニング入門：想像的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 石黒圭・筒井千絵 (2009)『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2005)『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』ひつじ書房
- 岡崎眸・岡崎敏夫 (2001)『日本語教育における学習の分析とデザイン：言語習得の視点から見た日本語教育』凡人社
- 学習技術研究会 (2002)『知へのステップー大学生からのスタディ・スキルズ』くろしお出版
- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子編 (2006)『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- 木下是雄 (1994)『レポートの組み立て方』筑摩書房
- 河野哲也 (1998)『改訂版 レポート・論文の書き方入門』慶應義塾大学出版会
- 国際交流基金 (2010)『書くことを教える』ひつじ書房
- 佐藤正光・田中幸子・戸村佳代・池上摩希子 (2004)『表現テーマ別・にほんご作文の方法〈改訂版〉』6版 第三書房
- 戸田山和久 (2002)『論文の教室ーレポートから卒論まで』日本放送出版協会
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009)『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
- 二通信子・佐藤不二子 (2003)『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 浜田麻理・平尾得子・由井紀久子 (1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- 藤原雅憲・初山洋介編 (1997)『上級日本語教育の方法』凡人社
- 細川英雄編 (2007)『総合活動型コミュニケーション能力育成のために 考えるための日本語 実践編』明石書店
- 細川英雄 (2009)『論文作成デザイン テーマの発見から研究の構築へ』東京書店
- 山辺真理子・谷啓子・中村律子 (2005)「アカデミック・ジャパニーズ再考の試み」『日本語教育』126号

(おおうち とよひさ 本センター非常勤講師)

(おおつか あつこ 本センター非常勤講師)

(たけうち ゆみこ 本センター非常勤講師)